

## イザヤ書46-47章「無益なバビロン」

### 1A 神々からの立ち返り 46

#### 1B 重荷となる神々 1-4

1C 自分で運ぶ神々 1-2

2C 自分を運ばれる主 3-4

#### 2B 昔から告げられる方 5-13

1C 高価な役立たず 5-7

2C ご計画を行われる方 8-11

3C 近づく義 12-13

### 2A 「私だけで、ほかにはいない」 47

#### 1B 落ちぶれる女王 1-7

1C 奴隷への転落 1-4

2C 主の民の汚し 5-7

#### 2B 役立たない呪術 8-15

1C 突然の喪失 8-9

2C 迷わせた知恵と知識 10-12

3C 滅んでいく助言者 13-15

## 本文

イザヤ書 46 章を開いてください。今晚は 46 章と 47 章を読んでいます。ここは、メディア・ペルシア連合軍によって滅ぼされたバビロンについての預言です。次回、48 章でイスラエルに対する、神のすぐれたご計画と約束が預言されていますが、バビロンに住むユダヤ人たちに対して、主は、バビロンにある偶像や知恵と、イスラエルの神の偉大さと知恵を比べています。この後者、イスラエルの神がいかに、彼らを愛され、真実を尽くしてくださっているのかを語っておられます。私たちは、偶像に満ちている社会の中で、キリストにあって神に捕えられました。その偶像とは、何も木や石で造られた偶像だけでなく、神以外の他に頼ることのできる無数のものも含まれます。そこから、贖い出されるところにある神のご計画は、ユダヤ人だけでなく、キリストにある異邦人の私たちにも語りかけられていると信じます。

### 1A 神々からの立ち返り 46

#### 1B 重荷となる神々 1-4

#### 1C 自分で運ぶ神々 1-2

<sup>1</sup>「ベルはひざまずき、ネボはかがむ。彼らの像は獣と家畜に載せられる。あなたがたの荷物は、疲れた動物の重荷となって運ばれる。<sup>2</sup>彼らはともにかがみ、ひざまずく。重荷を解くこともできず、

自分自身も捕らわれの身となって行く。

これは、バビロンの国が倒れて、自分たちの神々を牛車などに載せて運んで逃げていく姿を示しています。当時、国と国の戦いは、神々の戦いであるとみなされていました。国がある国と戦う時に、その国を代表する神が、相手国の代表する神に戦っているとみなしていたのです。したがって、ペルシアがバビロンを倒した時に、バビロンの住民は自分たちの神々が取り上げられて、奪われてしまうことのないように、こうやって獣や家畜に載せて運ばなければならなかったのです。主はイザヤによって、偶像の神がいかに頼りにならないかをはっきりと示してくださっています。

「ベル」という神は、バビロンの主神「マルドク」の別名です。「主人」という意味を表していて、カナン人の間のバアルに相当します。バビロンの最後の王ベルシャツアルの名前の中にも使われています。そして、「ネボ」はベルの息子と言われており、知恵や知識の神とみなされていました。ネブカドネツアルの名前に使われています。ネボは、毎年、祭りの時に牛の引く車に載せられる行事がありました。ベルとネボは、彼らによって神であったはずなのに、いざという時に彼らを助けることはせず、むしろ彼らの重荷となり、自分自身も捕らわれの身になっています。

#### 2C 自分を運ばれる主 3-4

<sup>3</sup> ヤコブの家よ、わたしに聞け。イスラエルの家のすべての残りの者よ。胎内にいたときから担がれ、生まれる前から運ばれた者よ。<sup>4</sup> あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。わたしは運ぶ。背負って救い出す。

主は、ヤコブの家、すなわち、バビロンにいるユダヤ人たち、残りの者たちに、バビロンの神々とは、ご自身が全く逆であることを証しておられます。ベルやネボは、自分で運ばなければいけません。主なる神は逆に、彼らを担ぎ、運んでくださっていました。胎内にいる時からと仰っていますが、神は何度となく、母の胎内で形造ったことを語られます。エジプトから連れ出して、ご自身の民として生まれさせてくださいました。さらに、主は同じように、白髪になってもこれから、背負って救い出すと言われます。バビロンからの救い出しも、主は責任をもって行ってくださいます。

バビロンの中に住んでいたユダヤ人たちにとって、これは必要な言葉でした。あたかも自分たちが神を支えなければいけないとってしまったかもしれません。自分たちの周りの神々は、すべて自分で運ばなければいけないからです。そして、日本の中に生きる我々キリスト者にも、必要な言葉ではないでしょうか？あたかも、自分が神にしっかり仕えていなければ、神は働かれないといわんばかりの思いになる時、その神が、聖書の神なのかを吟味する必要があります。過剰な責任感には、実はまことの神ではなく、他の神々に仕えてしまっていることがあります。

## 2B 昔から告げられる方 5-13

### 1C 高価な役立たず 5-7

<sup>5</sup> わたしをだれになぞらえて比べ、わたしをだれと並べて、なぞらえるのか。<sup>6</sup> 袋から金を惜しげなく出し、銀を天秤で量る者たちは、金細工人を雇って、それで神を造り、ひざまずいては、これを捧む。<sup>7</sup> 彼らはこれを肩に担いで運び、それがあつたところに安置すると、それはそこに立ったままである。これはその場所から動かない。これに叫んでも答えず、苦しみから救ってもくれない。

バビロンの偶像について、続けて主は語られます。バビロンの神々に取り囲まれていたユダヤ人たちには、自分たちの神への信頼をすべて置けずにおいて、ためらっているのでしょう。それで主が、「わたしを、だれとなぞらえているのか？だれと並べているのか？」と言われているのです。イスラエルの神にするのか、しかしバビロン社会にあるものを捨てるべきなのか？と迷っているのです。日本のキリスト者も、こうした悩みはありますね。キリストを取るのか、それとも周囲の神々にまつわる習慣は捨てないでいるべきだろうか？と悩むのです。それで主は、金を惜しみなく出す割には、その神は運ばなければならず、安置したら、立ったままで、その場所から動かないのだ。また、叫んでも答えず、苦しみから救わないのだと言われています。

偶像について、私たちは多くの費用がかかることを知っています。葬式についても、仏壇についても、仏式のものも多額な費用がかかります。世間体もあって、豪奢なものにしないといけないとも思い、多くのお金を費やします。けれども、そのことによって何か益になることがあったでしょうか？実質、ないですね。すべてを支え、すべてを施してくださる恵みの神と、なぜ比べて悩む必要があるのか？と訴えておられるのです。

### 2C ご計画を行われる方 8-11

<sup>8</sup> このことを思い出し、勇み立て。背く者たちよ、心に思い返せ。<sup>9</sup> 遠い大昔のことを思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。

心を奮い立たせなさいと鼓舞しておられます。遠い大昔と言われていますが、これは、バビロンに住む彼らによって、預言者たちのことば、神のことばは、はるか昔のことになるからです。けれども、この方以外には神はいないのです。そのことを証明するために、彼らの生きる 150 年前ぐらいに、すでにイザヤを通して、自分たちの生きる時代を預言していたことを示していたのです。

<sup>10</sup> わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。<sup>11</sup> わたしは東から猛禽を、遠い地から、わたしの計画を行う者を呼ぶ。わたしは語って、それを来たらせ、計画を立てて、それを実行する。

東からの猛禽とは、キュロス王のことです。バビロンにとってペルシアは、さらに東にある国です。

そこからやってきて、猛禽のようにことごとく、諸国を征服していきます。はるか昔に、自分たちの時代のことを語っておられるのです。

イエスご自身が、地上におられた時に、当時のユダヤ人たちが、自分たちの時を知らなかったことを嘆かれています。まさにこの時のために来られたのに、それを悟ることがなかったのです。「マタ 16:3 朝には『朝焼けでどんよりしているから、今日は荒れ模様だ』と言います。空模様を見分けることを知っていながら、時のしるしを見分けることはできないのですか。」もうすでに、恵みの時はやってきていたのに、心を閉ざしていました。

### 3C 近づく義 12-13

<sup>12</sup>わたしに聞け、頑なな者たちよ。正義から遠く離れている者たちよ。<sup>13</sup>わたしは、わたしの義を近づける。それは遠くはない。わたしの救いが遅れることはない。わたしはシオンに救いを、イスラエルにわたしの栄えを与える。」

主は、ペルシアのキュロスによって、彼らを解放して、エルサレムに帰還される日が近づいていることを教えておられます。以前、学びましたように、彼らの思いをはるかに超えて、異教徒を用いられて、イスラエルを救う働きを行わせるのです。そうしてご自身の義を表します。そして、救いをもたらし、ご自身の栄光を現します。これはこの前話しましたように、信仰によって救われる、神の義の現れに通じます。「Ⅱコリ 6:2 神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」

### 2A 「私だけで、ほかにはいない」 47

次に、バビロン自身に対して語りかけます。

#### 1B 落ちぶれる女王 1-7

#### 1C 奴隷への転落 1-4

<sup>1</sup>「おとめ、娘バビロンよ。下って行って、土の上に座れ。娘カルデア人たちよ。王座のない地面に座れ。あなたはもう、優しい上品な女と呼ばれることはないからだ。<sup>2</sup> ひき臼を取って粉をひけ。ペールを取り去り、裾をまくってすねを出し、川を渡れ。<sup>3</sup> あなたの裸はあらわにされ、恥もさらされる。わたしは復讐をする。だれ一人容赦しない。」

バビロンがペルシアの手に渡るのを、女王の座から降りて、奴隷の女になる屈辱として描いておられます。優しい上品な女は、自分の足が地面で汚れるのを嫌がるほどであります。女奴隷は土の上に座らなければいけないほどになります。それから、ひき臼を引くという肉体労働も課せられます。そして、顔の覆いを上品な女は着けますがそれも取り去られ、ユーフラテス川などを渡らなければいけない時に、すねを出さないといけません。そして、裸が露わにされて屈辱も味わいま

す。この描写を、バビロンの町全体に対して主は語っておられます。

バビロンの町は、前回の学びで話しましたように、それは巨大な都でした。中には、世界の七不思議に数えられている空中庭園がありました。イシュタル門も有名です。そして、中心には「エ・テムン・アン・キ」と呼ばれる天に近づく塔があり、マルドゥクを祭る神殿「エサギラ」もありました。

そのような巨大な都、強い都を主は、娘に喩えておられます。主は、ご自身と人々との関係を男女関係になぞらえることをしばしばなされます。イスラエルに対してもシオンの娘と語られることが多いです。そこには、「頼る」という意味合いがあります。女が頼ることのできる男性を探すように、人々は自分の頼れるものを探します。頼れる存在として、バビロンは自分だけは特別だと思っていました。他のものが倒れても、自分たちだけは倒れないと思っていました。その高慢、傲慢を主は砕かれます。

<sup>4</sup> 私たちを贖う方、その名は万軍の主、イスラエルの聖なる方。

バビロンが倒れる中で、イスラエルの残された者が神を賛美しています。自分たちを贖う方、また万軍の主です。そして聖なる方です。

### 2C 主の民の汚し 5-7

<sup>5</sup> 娘カルデア人たちよ。黙って座り、闇に入れ。あなたはもう、国々の女王と呼ばれることはないからだ。<sup>6</sup> わたしは、わたしの民を怒って、わたしのゆずりの民を汚し、彼らをあなたの手に渡したが、あなたは彼らをあわれまず、老人にも、ひどく重いくびきを負わせた。

主は、バビロンが地に座るだけでなく、闇に入ると宣言されました。これは、既に 14 章でバビロンの王が陰府に下るところで預言されています。人は死ぬだけでなく、死んでから裁きを受けます。

そして、バビロンが裁かれる理由が書かれています。イスラエルの民を、奴隷として酷使したことがその原因だったのです。確かに主はユダの民を裁かれるためにバビロンを器として用いられました。バビロンが彼らを捕え移したには、主の許しがあつてのことでした。しかし彼らは、「彼らを捕え移せたのだから、酷使しても構わないのだろう。」と、その捕囚の行為を正当化したのです。このことをエレミヤが預言しています。「エレミヤ 50:7 彼らを見つける者はみな彼らを食らい、彼らの敵は言った。『私たちには責めはない。彼らが、義の住まいである【主】、彼らの先祖の望みであつた【主】に対して罪を犯したためだ』と。」このことのゆえに、主は彼らに容赦ない裁きを下されます。

ここから二つの霊的教訓を得られます。一つは、「自分が用いられることは、自分を正しくすることではない。」ということです。イスラエルの民もかつて、この過ちを犯しました。カナン人を追い出す

のは、カナン人が悪かったため、イスラエルが正しかったからではありません。(申命 9:4)もう一つは、「倒れた人々に憐れみを持つ」ということです。主は一貫して、ご自身が裁かれたイスラエルを物笑いにし、彼らに害を加える異邦の民を厳しく裁かれています。人の落ち度によってその人が倒れる時に、神の立場に自分を置いて彼らを裁くことは御心に反することです。

<sup>7</sup> あなたは『いつまでも女王でいよう』と考えて、これらのことを心に留めず、自分の終わりのことを思うことさえしなかった。

終わりに心を留めていなかったことの警告です。終わりがあり、その時に報いがあるのです。けれども、そんなことはない。いつまでも、この安定した都は続くのだとおごったのです。私たちも、終わりのことを心に留めなければ、バビロンと同じように自分を中心に生き、満足してしまいます。

## 2B 役立たない呪術 8-15

### 1C 突然の喪失 8-9

<sup>8</sup> だから今、これを聞け。楽しみにふけり、安心して住む女よ。心の中で、『私だけは特別だ。私はやもめにはならないし、子を失うことも知らなくてすむ』と言う者よ。<sup>9</sup> 子を失うことと、やもめになること、この二つが一日のうちに、瞬く間にあなたのところにやって来る。あなたがどんなに多く呪術を行っても、どんなに呪文の力が強くとも、これらは突然あなたを見舞う。

バビロンの言っている、「私だけは特別だ」という言葉は、直訳ですと、「私だけで、ほかにはいない」です。分かりますか、主がずっと、「わたしが神である。ほかにはいない。(46:9)」と言われていますが、まさに同じ言葉を発しています。自分を神と同じ位置に置いたのです。他にいろいろな災いが人々に襲いかかっている時、それでも自分は大丈夫だと思っているなら、バビロンと同じ心の状態になっています。その安心は、神のみが持つておられる立場です。ご自分で存在することができる方、自存の方であります。神ではないものは、御心であればなくなってしまうもおかしくない存在なのです。だから、「主のみこころならば、私は生きている」と言いなさいとヤコブは手紙の中で話しました(ヤコブ 4:15)。

そして、バビロンが、子を失い、やもめになると宣言しておられます。やもめになるということは、自分の生活の糧がなくなる、それだけ財政的に、社会的に夫に拠っていました。エリヤが、シドンにいるやもめとその息子の話を思い出してください、自分たちは死ぬための準備をしていましたが、それは珍しいことではなかったのです。それに加えて子を失うことは、自分の扶養の支えを失うことです。つまり、全て自分に支えになるものが取り除かれるということです。

そして、これらのことが「突然」起こるということが特徴です。これは史実で確認できます。バビロンの王ベルシャツアルが大宴会を催していた時に、その夜にメディア・ペルシア軍が宮殿に侵入し、

彼を殺しました。主はご自分が来られることについて、心の用意ができていない人には、突然、盗人のように来ると何度も言われました。

### 2C 迷わせた知恵と知識 10-12

<sup>10</sup> あなたは自分の悪に拠り頼み、『私を見ている者はいない』と言う。あなたの知恵と知識、これがあなたを迷わせた。だから、あなたは心の中で言う、『私だけは特別だ。』

悪を行うことができるのは、「私を見ている者はいない」という、自分に対する欺きです。悪を行うときは、その時に神が見ていない、他の人が見ていないと思っているからできるのです。けれども、主はいつも見ておられます。

しかし、そのように思えるのは、自分に知識と知恵が、与えられているからです。悪を行ってことに報いがあることを見せない、知恵や知識です。それらが自分を迷わせるのです。真の知識、すなわち自分が神に対して罪を犯したということを、これらの知恵や知識と呼ばれているものは、覆い隠します。見せないようにします。違う言葉で正当化させます。そして、他の人たちには災いがあっても、自分だけには来ないと欺かせるのです。

<sup>11</sup> しかし、わざわざがあなたを見舞う。それを払いのける呪文をあなたは知らない。災難があなたを襲うが、あなたはそれを避けることができない。破滅は知らないうちに、突然あなたにやって来る。<sup>12</sup> さあ、若いときからの使い古しの呪文や多くの呪術を使って立ち上がれ。あるいは役立つかもしれない。脅かすことができるかもしれない。

バビロンは、占星術の中心地でありました。先ほど話したように、天に届くための、まさにバベルの塔と同じような、「エ・テメン・アン・キ」があります。そして、そのような呪術や呪法と学問がくっついていました。ネブカドネツアルの側近には、これらの呪法をする者たちと知者が一つのグループに入れられていたことを思い出してください。ダニエルは、そうした人々の長に選ばれましたね。今の時代、知識が捧まれています。あるいは、スピリチュアルなものも求められています。どちらも世の姿です。

しかし突然の滅びに対して、何ら役に立ちません。主は、このようにして人々の知識や知恵、また呪法によっても、主からの裁きを免れることはできないのです。「Iテサ 5:3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」

### 3C 滅んでいく助言者 13-15

<sup>13</sup> 助言する者が多すぎて、あなたは疲れている。さあ、天を観測する者、星を見る者、あなたに

起こることを新月ごとに知らせる者を 立たせて、あなたを救わせてみよ。

知識が多いと、疲れます。自分に差し迫った危機に対して、ああすればよい、こうすればよいという助言が多くなります。それを聞いているだけで疲れてきます。そこに主がおられるのだということが分かりさえすれば、主を認めるというところに、まことの知識があるのですが、それを拒んでいるので、他のもので代用しようとして、疲れさせるのです。

当時は、天の観測、星、新月による占いなど、いろいろな知識が主体でした。しかし、次を見ると、こうしたことを知らせている者たちが、神のさばきの対象になります。

<sup>14</sup> 見よ。彼らは刈り株のようになり、火が彼らを焼き尽くす。彼らは自分のいのちを 炎の手から救い出すこともできない。これは身を暖める炭火でもなく、その前に座れる火でもない。<sup>15</sup> あなたが若いときから仕え、取り引きしてきた者たちは、このようになる。彼らはそれぞれ自分勝手に迷い出る。あなたを救う者は一人もいない。」

彼らが救い出すどころか、神のさばきの火によって滅んでしまいます。

私たちの周りにも、知恵や知識と呼ばれるものが沢山あります。しかし、それらに自分の終わりや救いを求めることはできません。終わりの日が近づくとつれて、主なる神の証しでなければ生きられないことが明らかになります。

また、個人的な終わり、つまり死が近づく時にも、その他の知恵や知識と呼ばれているものに救いはありません。むしろ、ここに書かれているように、自分を疲れさせるだけなのです。伝道者の書にそのことが書かれています。彼が最後に述懐しました。「伝道者 12:12-13 わが子よ、さらに次のことにも気をつけよ。多くの書物を書くのはきりが無い。学びに没頭すると、からだが疲れる。結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」主を恐れること、これが私たちの魂に安らぎを与え、私たちの魂を生かします。